

# 日本の巡礼と四国遍路

田中智彦

## 1 日本の巡礼の特徴

巡礼という語を辞（事）典類で検索すると、聖地や霊場をめぐる参詣の旅をすることとみられる。「巡拝」「巡る」などいろいろな記述がみられるが、日本語の巡礼は「巡る」ことに重点が置かれることが明らかになる。

一方、日本語の巡礼に相当する Pilgrim (Pilgrimage) を OED で検索すると、ある場所からある場所へと旅する者、宗教的な信念からある聖地へと長距離の旅をする者、と説明される。英語の巡礼では聖地を「巡る」という意味が現れず、この点に日本の巡礼との大きな違いがある。

巡礼は形態的に、メッカへの巡礼のような単一の聖地へ向かう巡礼（単一聖地巡礼）と、四国遍路のような複数の聖地をめぐる巡礼（複数聖地巡礼）に分類できるが、「巡る」という意味の有無は、巡礼の構成要素においても違いを生じる。巡礼の基本的な構成要素は、第一に巡礼地となる聖地、第二に聖地に向かって集まる巡礼者、第三に巡礼者が歩む巡礼路である。これらが有機的に関連して巡礼行為は成立するが、逆にどの一要素が欠如しても巡礼は成立しない。

複数聖地巡礼では、巡礼者が初めの聖地（札所と呼ばれる）へ到達してから巡礼が開始される。したがって居住地、あるいはある起点から最初の聖地までの経路は、巡礼路とは呼ばれない。最初の聖地から次々と聖地をめぐる、最後の聖地まで至る経路が巡礼路となる。星野英紀氏は、最初の札所から最後の札所までが一種の「巨大な聖地」とも指摘する。

日本の場合、巡礼が複数聖地を巡ることに限定されても、任意に複数の聖地を巡るのではなく、巡礼は規定の聖地をめぐる行為に限定される。かつて存在し、また現在存在する巡礼の諸形式について一覧にすると、聖地数は3から108までが認められる。たとえば、3薬師は薬師如来を安置した3カ所の聖地をめぐる巡礼であり、聖地数88には弘法大師八十八所があり、個別巡礼として四国八十八カ所が含まれる。これら巡礼には、薬師・観音・地藏など仏教諸尊を安置した聖地、また天神三社・神明五社など神社、そして弘法大師・親鸞・法然・真盛・役行者など宗旨・宗派の祖師の足跡をたどるものがみられる。

## 2 西国巡礼・四国遍路の成立と発展

四国遍路の成立を考える上で参考になるのは『三教指帰』である。弘法大師空海は阿波の大龍寺山や土佐の室戸岬で修行をしたと記す。時代はやや下るが、後白河法皇の『梁塵秘抄』には、遍路の語源と考えられる「四国の辺地」という語がみられる。また同書には四方の霊験所として、土佐の室戸や讃岐の志度が記される。これらの史料から、平安時代には四国が修行の場として認められ、霊験あらたかな場所が存在していたことがわかる。

ところで平安時代には、聖と呼ばれる修行者が山中で修行をし、市井の人々に仏教を広めていた。人々は聖に結縁し、利益を得ようとして「聖の住所」に詣でていた。『梁塵秘抄』にみられる「聖の住所」には那智山・新宮などとならび、石鎚山もみられる。また清水寺・石山寺・長谷寺など観音の靈驗あらたかな寺院が挙げられ、『源氏物語』や『枕草子』などにみられるように、現世利益を求めて多数の人々が参詣していた。

こうした状況の中、巡礼に関して最初の記述がみられるのは『寺門高僧記』行尊伝・覚忠伝である。行尊は日数120日、覚忠は75日で三十三所巡礼をしたと記されている。巡礼に関わる記述が園城寺の高僧伝に現れ、札所に天台系寺院が多いことなどから、三十三所観音巡礼（後の西国巡礼）は、天台寺門派により、観音の靈驗所と聖の住所のうちから33カ所が選定され、平安末期に成立したであろうと速水侑氏は考察している。

なお四国にも靈驗所や聖の住所があり、巡礼が成立する素地は存在していたと考えられる。しかし四国遍路がいつ頃成立したのか、史料的には明らかにできない。おそらく西国巡礼と同時期か、あるいはやや遅れて成立したであろう。

遍路が初めて確認できる同時代史料は、弘安3年（1280）の山科醍醐寺の文書である。醍醐寺の不住院主某は、両山（大峰山・葛城山）の抖そ、那智での千日籠山、笙岩窟での冬籠など山伏の修行をし、さらに四国遍路や三十三所諸国巡礼（西国巡礼）をしたとみられる。四国遍路の存在が明らかになるとともに、山伏の修行の一環として三十三所巡礼や四国遍路があったことがわかる。

西国巡礼は断片的ながら、幾つかの中世文書や記録類に現れる。『太平記』の「大塔宮熊野落事」には、山伏が那智の千日籠山を終えて巡礼に出てきたという記述が認められる。また時代が下るが、『竹居清事』には、永享（1429-40）の頃に巡礼者が多く、納札の慣習が成立していたことが記され、『天陰語録』には、笈摺の着用と、巡礼が大変な苦勞であったことが記述される。そのほか文安4年（1447）の勝尾寺文書には、僧侶に率いられた俗人の巡礼者がいたこと、『大乘院寺社雑事記』には、文正1年（1466）に聖護院道興が山伏ら30人を含む総勢70人の団体に巡礼していたことがみられる。これらの記録から、15世紀半ばには、山伏の修行としての巡礼がみられるだけでなく、民衆が巡礼に参加していたことが明らかになる。

ところで四国遍路では中世文書が欠如し、中世の状況はほとんど明らかにならない。ただし中世末、16世紀後半の墨書が札所の幾つかに発見されている。それら墨書からは書写山や高野山の僧侶が巡るとともに、山城国の俗人も遍路していたことが知られる。つまり修行としての巡礼と、俗人の巡礼が混在した状況であった。

西国巡礼は室町時代に一般民衆が巡礼に参加するようになり、また同時期に納札や笈摺の慣習が始まったと考えられている。そして15世紀半ば以後、それまでの「三十三所」巡礼の表記から「西国三十三所」巡礼の表記が優勢となり、同時にそれまで「巡」を書いていた巡礼が「順」に変化する。これは東国からの巡礼者の増加に起因するものと思われる。東国から見て西国であり、那智山から谷波寺まで札所の順序通りに巡れるのは、東国から訪れた巡礼者だからである。

### 3 真念と近世の四国遍路

近世初めには、空性法親王や澄禅の遍路記録がある。ただしこれらの記録を見る限り、いまだ札所やその番号が確定していないような、漠としたところが四国遍路にはある。

しかし、17世紀末になると四国遍路の「仕掛け人」ともいべき真念という僧が現れる。彼は大阪に居住し、高野山とも関係していた。真念の業績は、大きく三つにまとめられる。第一に『四国辺路

道指南』という案内記を出版をした。この案内記は広く流通し、宝暦13年（1763）に最初の遍路絵図を作成した細田周英や、宝暦14年（1764）に遍路した古川古松軒も持参したと記す。実際、真念の案内記は幕末まで増補改訂版が出版され、真念以外の編集になる案内記が出版されるのは寛政期である。なお案内記と関連して、遍路の功德を説く書や札所の霊験記も出版している。第二には、遍路道沿いに道標を建立したことである。200基以上の道標を建立したことが『四国偏礼功德記』に見え、喜代吉栄徳氏によれば、現在でも32基が確認されるという。第三は、遍路道沿いに真念庵（土佐清水市市ノ瀬）を建立したことである。この付近では、札所の番号順に巡ると道順が悪くなるので、経路の案内や、遍路者の宿泊・休息の利用を考えたものであろう。

真念の様々な方策は、裏を返せば、それまで遍路道が未整備であり、遍路者数が少なかったということの証であろう。札所の過去帳から死亡遍路者数を集計した前田卓氏の研究によれば、死亡遍路者が増えるのは18世紀末からであり、19世紀に入ると急増し、天保期をピークとして幕末に向かい減少する。真念が活躍した17世紀末の死亡者数は非常に少数であり、18世紀前半でも増加はみられるが、急増ではない。死亡遍路者数の変動は遍路全体の増減を反映しようから、これが遍路者数の動向と考えてよいだろう。

児島半島の味野村（倉敷市）では、女性も遍路に出ているが、18世紀末になるまで男女とも遍路の数は皆無に等しい状況である。それが19世紀になり、文政・天保初め頃にピークを示す。これは過去帳調査の傾向とも類似する。ということは、遍路者が増加するのは、真念の活躍直後の18世紀ではなく、むしろ19世紀前半であったということになる。

遍路者の年間総数やその推移については記録が不明であるが、西国巡礼の巡礼者数からある程度の推測ができる。『熊野年代記』によれば、西国巡礼では近世半ば以後の巡礼者が、多い年で3万人、少ない年でも1万人いたと記録されている。次に述べるように、遍路者の出身地域が限定されていた四国遍路では、これよりも少ないと思われる。

遍路者の出身地は、前田卓氏の研究では、紀伊・讃岐・阿波・摂津・備中など四国内か、四国と海を隔てて接するところからが多く、東北地方や武蔵を除く関東地方、北陸地方、東海地方、九州南部などからの遍路者が少なくなる。概して遍路者は四国内か近隣地域からは多いが、それ以外の地域では少ない。これは四国遍路が現在考えられている以上に、近世には地域的なものであったということであろう。

一方、前田卓氏の納札を資料とした西国巡礼の調査によれば、巡礼者が増加するのは元禄期で、次のピークが文化・文政期に現れている。これと呼応するように、西国巡礼の案内記で最も古いものは、元禄3年（1690）の『順礼道しるべ』であり、この書以後、多くの異なった内容の案内記が幕末まで刊行されていく。巡礼者の出身地も、四国遍路よりも広範囲の東北地方南部や関東地方に広がり、またその数も多くなっている。こうした点で、近世の西国巡礼は四国遍路とはかなり異なった傾向を示す。

#### 4 四国遍路の発展の一形態：地域的巡礼地

一般的に巡礼の発展は、巡礼者数の増加や巡礼者の出身地域が広がりとして表れることはもちろんであるが、巡礼の時間的・空間的な簡略化が一つの方向としてあることを島崎博氏は指摘している。確かに四国遍路を模倣した地域的巡礼地、たとえば小豆島八十八箇所などはこの方向での発展と考えられる。

ここでは四国遍路を模倣した巡礼地について検討してみる。全国の33カ所と88カ所の巡礼地をまと

めた、北川宗忠氏の著書から県別にそれぞれの数をまとめた。

88ヵ所では岡山・千葉・福岡・山口・新潟・愛媛・東京・埼玉の各都県に多く見られるが、東北地方や九州の大部分の県では少なくなる。岡山・山口・福岡の各県は四国の対岸という地理的な位置が大きく影響している。

一方、33ヵ所は必ずしも近畿地方やその周辺部に多いというわけではなく、大分・福岡・岡山・島根・京都・愛知・静岡・新潟・神奈川・東京・群馬・福島・山形・岩手の各都県など全国にわたって地域的巡礼地が形成されている。

こうした点でも、西国巡礼と比べると、四国遍路はその広がり狭いといえる。おそらくこれは四国遍路の発展が近世末頃であった、つまり全国展開するには歴史が浅いことに起因すると思われる。四国遍路は西国巡礼と同様に歴史の古い巡礼であるが、多数の人々が参加するようになるのが遅かった。そのために地域的巡礼地の全国展開も限られていたといえる。結局、四国遍路が全国的な巡礼地として今日のような地位を獲得したのは、近代以後になってからと推測できる。



公開講座案内板（愛媛大学正門）